気まぐれで器用貧乏な万能手

ハヤヲ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第一次大規模進行。両親を無くしボーダーに入る。

器用貧乏な彼女がボーダーで生活していくお話。

原作より少し前からスタート。

ゆったりまったりの更新予定。

目　次

プロローグ ―――――――――――――――――――― 1
第1話 ―――――――――――――――――――――― 6

プロローグ

ーキャラ紹介ー
古賀　樟葉（こが　くずは）
プロフィール
年齢：１７歳
誕生日：４月３０日
身長：１５２ｃｍ
血液型：Ｏ型
職業：高校生
好きなもの：読書（漫画含む）、焼肉、猫、スポーツ
ファミリー
父、母、猫
ポジション：万能手
パラメーター
トリオン→１５
攻撃　→１３
防御・援護→１０
機動　→９
技術　→９
射程　→８
指揮　→１
特殊戦術→２

トータル→６７

師匠→なし
同期→太刀川、風間、東、等々…

ＴＲＩＧＧＥＲ
メイン

???　???　???　シールド
サブ
???　???　シールド　バックワーム

容姿は黒髪ショートボブで澄んだ碧色の瞳が特徴。
勉強、スポーツ共に人並み以上。何をやるにもそつなくこなす。だが、その手のスペシャリストには一歩届かないことから本人は「器用貧乏なだけ」と言っている。
第一次大規模進行で両親他界。祖父母、親戚等も不明のことから、ボーダーに入り本部に住み着いている。飼い猫の「チト」は防衛任務のときに助けなつかれたため、一緒に暮らしている。
ボーダーの中では古参になるが、チームを作らないためずっとB級。だが、ソロながら本部に作戦室を貸してもらっているので、生活費には困っていない。普段から自炊しているため料理にはそれなりに自信がある。時々、カップラーメンしか食べてない鬼怒田さんのために手料理を持っていく。だが、本当の理由はトリガーをいじってもらうためのポイント稼ぎでもある。

サイドエフェクト
ー無想ー
心を無の状態にし、雑念や余計な情報をカットする。
精神状態の乱れを防ぎ、純粋に戦いに集中できるため最大限力を発揮できる。
最初は無意識に発動していたが、今では訓練してオンオフを使い分けることが可能。これにより、通常時よりもトリオンの質が変わり、技の精度やシールドの強度が格段に向上する。
使用には脳に多大な負荷がかかる。

ーーーーーーーーーーーー

「ふあぁ～。ひまぁ～。お腹減った～。」

私は今、防衛任務に出ている。何故かと言うと、門(ゲート)を開いてやって来る異世界からの来訪者の近界民、通称ネイバーから市民を守らなくてはならないからだ。なのに、どうして欠伸しながら屋根の上で座っているのかと言うと……ネイバーが来ないからである。

正しくはトリオン兵が来ないのだ。私はB級なのでトリオン兵を倒さないとお給料が貰えない。だからといって、トリオン兵が沢山きて市民を危険に晒すわけにもいかないので、気長に待つしかないのだ。

『樟葉ちゃん、真面目にやってよ～』

「あ、緑川くん。ごめんね？聞こえちゃった？」

気だるげにしていると通信が飛んでくる。相手はA級草壁隊アタッカーの緑川駿。中学生ながらA級に上がるというエリートだ。

『バッチリ聴こえてたよ。オレだってまだ飯食べてなくてお腹すいてるのにさ～』

時刻は八時過ぎ、夕飯を食べてなければお腹が空いてもおかしくない時間帯。

「なら、後で私の部屋に来る？何か作ってあげる」

『え!?まじ!!じゃあオレ！肉食いたい!!』

さすが中学生というか男の子というか、肉が食べたいとは中々にアバウトな回答。ならここは、冷蔵庫にある食材で作れる生姜焼きにしよう。

「肉ってアバウトすぎだね。…そうだ！じゃあ生姜焼きとかどう？」

『やったね！』

付け合わせは何がいいか悩んでいると警報が鳴り、目の前に複数のゲートが開いた。

『こちら、中央オペレーター室。ゲート発生。誤差０．３５です。速やかに対象お願いします。』

「古賀、了解～」

『緑川、了解!!』

敵はバムスター８体、モールモッド１０体。今まで来なかった分が一度に来た感じである。

「緑川くん。バムスター3体とモールモッド5体お願いしてもいい？残りは私がやる。」
『オッケー、任せて！』
「じゃ、よろしくね！」
　通信を切りトリオン兵に突っ込んでいく。今日の私のトリガーセットは銃手（ガンナー）よりの構成なので中距離ができるぐらいの間合いをとる。
　今のトリガーセットは、メインにアステロイド（拳銃）、バイパー（拳銃）、鉛弾（レッドバレット）、シールド。サブにレイガスト、スラスター、アステロイド（拳銃）、バックワーム。
　片手に拳銃（ハンドガン）を持ち、まずはモールモッドに近づく。モールモッドは戦闘用のトリオン兵の為、動きが早い且つなかなかの硬度を持つブレードを避けながら戦わなくてはいけない。そこで私はすぐさまハンドガンをアステロイドから鉛弾（レッドバレット）に変え、左手にレイガストをシールドモードで展開した。そして、モールモッドの間合いに入るとブレードによる鋭い一撃が迫ってくる。それを私はレイガストで受け流し、ブレードと足の根本に鉛弾を撃ち込む。その作業をひたすら繰り返し、あっという間にモールモッド5体はその場から動けなくなる。
　そして、ひとまず放置し、次に市街地に向かっているバムスターの処理に向かう。
　バムスターは捕獲用なので装甲は硬いが攻撃力は殆どない。ボーダーのB級以上なら誰でも楽勝に倒せる敵である。一番先頭のバムスターに追い付くと、左手に持っていたレイガストをブレードモードにする。私は小柄の為、普通のレイガストのブレードだと重い（トリオン体の場合筋力は弄れるが、ブレードに振られてるという気持ち問題。）ので刀身を短くし短刀にして逆手で扱っている。そして目の前でジャンプし、スラスターを起動。バムスター弱点である目を目掛けて加速し、そのまま切り裂いた。残りの3体はアステロイドとバイパーを使い分け倒し、最後の1体はブレードモードにしたレイガストをスラスター使いバムスターの目を目掛けてぶん投げて仕留めた。

そして先程放置してきたモールモッドをアステロイドで仕留め終了した。

「ふぅ。終わった。この構成はトリオン兵向きじゃないかな～。対人では中々楽しいんだけど…」

等と今回のトリガーセットの反省をしていると、緑川くんの方も終わったみたいで合流した。

「お疲れ様。緑川くん」

「ありゃオレの方が早いと思ったのに～樟葉ちゃん流石だね」

「私も今終わったところだから。そんなに変わらないよ？…さて、オペレーターさん。トリオン兵は片付けました。回収班をお願いします。」

『了解です。お疲れ様でした。次の隊に引き継ぎ次第上がってください。』

「はーい。じゃあ行こっか緑川くん。」

このあと引き継ぎを終わらせ、作戦室（私の部屋）に戻り緑川くんと本日の晩御飯である生姜焼きを一緒に食べた。

第1話

私の名前は古賀樟葉。17歳の現役の女子高生で、しかもボーダーのB級隊員。三年以上もボーダーにいるのにソロ隊員。みんなにはなぜ？と言われるんだけど、いつも有耶無耶にしている。A級の人やB級の上位にいる古参の人たちにスカウトされたりもしたけど全部丁重にお断りしてきた。私は自由気ままに生きていたいのだ。それでもソロランク戦にはちょこちょこ足を運んでいる。

今もランク戦するためにブースの近くにあるソファーでお茶を飲んでいる。すると、一人が私に近づき声をかけてきた。

「よう樟葉、よかったらランク戦しねーか？」

「こんにちは、出水くん。いいよやろっか」

相手はA級一位太刀川隊の出水公平くん。天才射手で合成弾なんかも彼が編み出した。本人いわく何かやってみたらできた。とのことらしい。すごいね。そんな私もバイパー等の扱い方を少し彼に教えてもらった。だからこうしてよくランク戦に誘われるのだ。

適当なブースに入ると出水くんから申請がきた。勿論承認し、通信で何本やるかを決める。

「何本やる？」

『とりあえず10本で。』

「オッケー！」

『そういえば今日のメインは弧月なのか？』

なぜ、そのような事を聞くのかというと、私は普段から頻繁にトリガーセットを変えているからである。

その日によって攻撃手（アタッカー）になったり射手（シューター）になったり銃手（ガンナー）になったりする。狙撃手（スナイパー）はじっとしてるのが嫌であまりやらない。それにあま

り狙撃が得意じゃないから完璧万能手（パーフェクトオールラウンダー）ではない。だいたい私は器用貧乏なだけでパーフェクトではない。
話を戻すと、私の今日の気分はバリバリの攻撃手なのだ。その為、弧月に旋空、後は定番のシールド二枚とバックワームしか入っていない。
「そうだよ！忍田さんスタイルで旋空をフル活用するつもり。付け加えると、出水くんの弾も切らせてもらおうかな？」
『げっ!!厄介なときにさ誘っちまったか…。』
「じゃあ、始めようか！」
転送が開始され、出水くんとの１０本勝負が始まる。

ーーーーーーーーーーーーーー

ステージ、市街地Ａ。昼間、天候晴れ。

『ランク戦１０本勝負。一本目開始。』
転送が完了後、私はレーダーで出水くんの場所を確認する。距離は少し離れているので、このままだと射手が有利になってしまう。兎に角、姿だけでも視認しようと屋根に登り最短で近づくことにする。すると、前方から無数のハウンドが飛んできた。これは追尾弾で、トリオン反応に任せて射ってきたと思われるので左右に避けながら回避する。しばらくして出水くんの姿が見えるとこまで近づけた。でも、大変なのはここからである。
此方が見えれば彼方も見えることになるので、また無数の弾丸が飛んでくるのだ。
早速、出水くんがトリオンキューブを両手に出し、それを分割、放ってきた。凄まじい程の弾幕、並の人ならこれでシールド割られてベイルアウトしただろう。だが、私は右手を前に出し、二枚のシールドを広範囲に使ってフル防御した。
「うおっ！相変わらずシールド堅えーな！」

「ごめんね？トリオンは人よりちょっと多いの」
「何がちょっとだ！ヒビすら入ってねーくせに！…バイパー！」
出水くんは追撃とばかりに四方八方からバイパーを放ってくる。
私は居合いの構えをし弾をよく見る。
「旋空弧月」
身体に当たりそうな弾を集中的に旋空を利用しながら斬り落とした。
だが、完全には落としきれなかったので腹に何発か当たってしまった。勿論致命傷ではないのでそのまま突っ込む。ここまでくれば攻撃手の間合い。私はすぐさま旋空を起動し、出水くんのシールドごと削り倒した。
「くそ、やられた」
『戦闘体活動限界。緊急脱出（ベイルアウト）。』

ーーーーーーーーーーーー

現在、ラウンジで出水くんと二人でお茶をしている。
先程行ったソロランク戦は、7対3で私が勝った。
お互い防衛任務もないことからゆっくり話でよしようとの事でブースからラウンジに移動してきたのだ。
「そういえば出水くん。今日は米屋くんと一緒じゃなかったの？」
私は、出水くんがランク戦をやる時は米屋くんも一緒のイメージが強い。あと、緑川くんも。三バカと言われるだけはあると失礼ながら思った。
「槍バカは宿題やってるよ。明日から新学期だってのに全く手を付けてなくてな。今頃、秀次が面倒みたんだろ。」
「あー。明日から新学期かー。」
「樟葉は宿題大丈夫なのか？」

「私は3日で終わらせたし。」
「流石だな…。」
　春休みの宿題なんて大して量もないし、復習問題しかでないからノート見てればすぐ終わるものだ。それにしても明日から新学期だってことは完全に忘れていた。まあともあれ。
「同じクラスになれるといいね！」
「っ!!??…そ、そうだな。」
「じゃあ明日の準備があるから私は部屋に戻るね！バイバイ出水くん！」
「お、おうまたな。」

ーーーーーーーーーーーー

ゴゥーン
「ただいま～」
「おかえり～」
　私は作戦室兼自室に戻ってくると、何時もの癖でただいまを言う。すると返ってくるはずもないおかえりを言われた。

　するとそこには、実力派エリートの迅悠一が私のソファーにくつろいでぼんち揚を食べていた。
「トリガー起動（オン）…。」
「ちょっ!!!!」
「旋空弧月」
「ストップ!!ストップ!!今俺トリオン体じゃないから!!!」
　そんなのお構い無しにぶっぱなしてやろうと思ったけど、私の部屋が滅茶苦茶になるのは嫌だったので仕方なく弧月を鞘に戻し換装を解いた。本当に仕方なくよ？
「はぁ…で、迅さんなぜ私の部屋に？」
「い、いや～少し未来を告げに。あ、ぼんち揚食う？」

「……いただきます。」
迅さんのサイドエフェクトは何でも、未来を見ることができるらしい。それは勿論、良い未来も悪い未来も。
確かに未来を見ることができるのはすごいことだし、戦闘になればとても脅威的かもしれない。でも絶対に回避することのできない悪い未来、例えば友人が死ぬ未来なんかを見たときには絶望的だろう。
サイドエフェクトの別称は副作用と言うらしく、私は得心した。人とは違う力を持っていると何かしらの苦悩があるのだ。ソースは私。
「どんな未来ですか？」
「近々イレギュラーゲートが開くことになる。そして、それと同時に人形近界民（ネイバー）がくる。」
「!?それは敵として、ですか？」
人形近界民とは私たちの世界にトリオン兵を送り込んでくるやつらのことだ。基本、トリオン兵に任せてこちらの世界に人間を捕獲しにくる。でも、人形がくることになると相当厄介なことになるはず。どんなことになるかは想像できないけど…。
「いいや、そいつは味方になる可能性が高い。でも、本部がそれを許さない。だから俺が動いているんだよ。」
「なるほど、それでソロの私に協力して欲しいってことですか？でも、私も一応本部の人間です。城戸さんに命令されて、それに反したら私は隊務規定違反でトリガーを取り上げられますよ。最悪除隊です。」
「そこは大丈夫。B級のお前に命令はされないよ。A級だけしか関わらない事だからね。それに隊務規定違反のほうは何とかするよ。」
A級しか関わらない事だからって、それ私関わっちゃいけないことのような気がするのは気のせいなんですか？そうですか。
「わかりました。それで、私は何を？」
「今すぐ何かしてくれって訳じゃないけど…
そうだな、とりあえず実力を見せてもらおうかな。明日から俺と模擬戦してもらう。」
実力？迅さんとは昔に何度も戦っているから知っていると思うんだけど。S級になるよりもさらに前、スコーピオンができる前から

戦ってるし…

「じゃまた明日。」

そう言い残して迅さんは部屋を出ていった。

あ、明日からの学校の準備してなかった…。